

きつと討つて下さいと祈っているの
であろう。このあわれな姿を見た時
思わず両眼がカッと熱くなつて汗と
共に悲痛の涙がとめどなく流れ続け
た。戦争には絶対に負けられない。

部隊全員が悲壯な面持で焼きつき
た市街をぬけて吹上浜へと急行し
た。炎天下の道路を砂塵をあげて急
行軍してようやくたどりついた吹上
浜は、白砂青松遠浅の海岸が、大き
く弓なりに南北に長く伸びている。
アメリカ軍の上陸作戦には最適の場
所とみた。この浜の西方六百キロの
海上に沖繩があり、これを制圧した
アメリカ軍が次期上陸作戦を目指し
て着々と攻撃準備を進めているはず
である。海岸に向つて押出すように
迫っている山中には、阿蘇兵団数万
の将兵がアメリカ軍の上陸を阻止す
るため、秘かに山中に展開し防衛陣

地の構築に余念がなかった。一刻の
予猶もできない。

我々の部隊は直に海岸から千メー
トル程山中に入った海拔七一・四メ
ートルの小高い山頂を中心に防衛陣
地を構築すべく、それぞれの部署を
きめて布陣することになった。先ず
宿舎の建設である。起伏のはげしい
山の中には夏草が生い茂り樹令三十
年ばかりの杉の大き木が、谷間から山
頂へビッシリと植林されている。部
隊は茂みの中に分け入り比較的なだ
らかな斜面を見つけては、杉の立木
をそのまま柱として孟宗竹（もうそ
うちく）でつないで骨組をつくり、
附近の農村一体から藁（わら）を集
めて屋根を葺（ふ）き壁をつくった。
窓は空いているが戸がない。床に藁
を敷き毛布二枚の間に入って寝るの
である。風の強い時は木立がゆれて

小屋全体が船のようにゆれる。勿論
電灯水道もない一野戦の仮小屋であ
る。食器が足りないので近くの竹藪
から太い孟宗竹を切り出し節のここ
ろから切りはなして食器にする。食
事は炊事班が谷底において谷川の水
で炊事をする。配給されてくる食事
は米粒の中に豆粕や高粱（こうりよ
う）の混入しているもので、豆粕等
は昔は牛の飼料であったものが、こ
こでは人間の食糧である。おかずは
塩水にさつまいも等の葉っぱが少し
ばかり浮んでいる程度のものであ
る。長引く戦争で国全体に物が不足
し第一線の軍隊でもこの有様であつ
た。

便所は山腹に幅五十センチメート
ル長さ十メートルくらいの深い溝を
掘り周囲をむしろで囲いその中で用
を足す。屋根などはない。用便が終